

企画展

只見の自然に生きる！

只見の野生動物と その生態



はじめに



センサーカメラがとらえたニホンカモシカ(下福井)

只見町はその面積が74,753haにおよび、そのうちの約9割が森林原野に覆われています。また、日本有数の豪雪地帯であり、その降雪の影響を強く受けた雪食地形やブナ林をはじめとした様々な森林群集から構成されるモザイク植生が発達し、多様で複雑な自然環境が形成されています。さらには、こうした自然環境がほとんど人手の入っていない原生的な状態で広大な面積にわたり残されていることから、多くの野生動物が生息しています。

野生動物のうち、哺乳類は現在地球上に約4,000種、日本には約100種が生息していると言われています。只見町では、35種の哺乳類が確認されています。しかし、これら哺乳類の多くは夜行性・森林性であるため、私たちが直接目にする機会は多くはなく、その生態についてもあまり知られていません。今回の企画展では、只見町で確認されている哺乳類についてその種ごとの生態をセンサーカメラが捕えた貴重な写真などをまじえて紹介します。

また、近年、その野生動物、特にツキノワグマによる農林業被害や人身被害が発生し、大きな社会問題となっています。只見町のような山間地域では、ツキノワグマと隣合わせで生活していかなばならず、そのためには、その生態について知ることが重要です。ツキノワグマの生態に重点を置き、人里への出没と餌資源の関係、繁殖、子育てなどについて紹介します。

さらには、人間と野生動物の関係としての狩猟、只見町の生態系を脅かす北上する大型哺乳類や外来生物の問題についても紹介します。今回の企画展が、野生動物への理解を深め、今後の彼らと私たち人間との共生への一助になれば幸いです。

只見町における哺乳類の生息状況

■モグラ目(食虫目)

トガリネズミ科

- カワネズミ
- ニホンジネズミ

モグラ科

- ヒメヒミズ
- ヒミズ
- アズマモグラ

■コウモリ目(翼手目)

キクガシラコウモリ科

- キクガシラコウモリ
- コキクガシラコウモリ

ヒナコウモリ科

- モモジロコウモリ
- クロホオヒゲコウモリ
- コテングコウモリ
- アブラコウモリ



■サル目(霊長目)

オナガザル科

- ニホンザル

■ネズミ目(齧歯目)

リス科

- ニホンリス
- ニホンモモンガ
- ムササビ

ヤマネ科

- ヤマネ



ネズミ科

- スミスネズミ
- ヤチネズミ
- ヒメネズミ
- アカネズミ
- ドブネズミ
- ハツカネズミ

■ウサギ目(齧歯目)

ウサギ科

- ニホンノウサギ



■ネコ目(食肉目)

クマ科

- ツキノワグマ

イヌ科

- ホンドギツネ
- ホンドタヌキ

イタチ科

- ホンドテン
- ニホンイタチ
- オコジョ
- ニホンアナグマ



アライグマ科

- アライグマ

ジャコウネコ科

- ハクビシン

■ウシ目(偶蹄目)

シカ科

- ニホンジカ

ウシ科

- ニホンカモシカ

イノシシ科

- ニホンイノシシ



クマに皮を剥がされたカラマツ



クマに鋭く噛み切られた木の枝

明け方の森を徘徊するツキノワグマ (柴倉山)

ツキノワグマ *Ursus thibetanus*

クマ科クマ属

全長は1.1m～1.5m、体重は40～150kgほど。東アジアに分布し、日本では本州、四国に分布。九州では絶滅した可能性が高いとされています。全身は黒色で、胸に名前の由来となる白い三日月模様があります。しかし、この「月の輪」がない個体も稀にいます。山地から海岸近くまでの冷温帯広葉樹林（ブナ林）を中心に生息しており、森林生態系の頂点に君臨する大型野生動物です。植物の新芽や果実、アリやハチなどの昆虫類、春先に餓死などの要因で死亡したシカやウサギなども食べる雑食性です。6月～7月頃にかけて繁殖行動を行い、冬眠（冬ごもり）期間中に200～400gほどの赤ん坊を通常2頭出産します。

只見町では、町内全域の林部に生息し、詳しい個体数は明らかではありませんが、相当数生息しているものと思われます。春に、でーろっぱ（ヒメザゼンソウ）やミズバショウを食し、冬期間中に溜めこまれた糞を排泄することが知られており、山菜取りなどの途中、クマの糞を見つけることがあります。秋には、ブナ、ミズナラ、クリなどの堅果を採食するため、熊棚などを目にする必要があります。近年は、山の成りが悪い年（ブナやミズナラが不作の年）に、冬眠前のツキノワグマが、クリやカキなどの餌を求め里山に出て、民家のすぐそばに出没する事例が増えています。

一見、凶暴な動物と考えられがちですが、意外と臆病で繊細なため、人前に姿を現すのは稀です。



春先に黒沢の集落そばに現れたカモシカ。円内は眼下腺を木にこすりつけマーキングをしているところ

ニホンカモシカ *Capricornis crispus*

ウシ科カモシカ属

体長70～90cm、肩高70～90cm、体重30～50kgほど。本州、四国、九州の低山帯から亜高山帯にかけて生息します。日本固有種として極めて重要であることから、国の特別天然記念物に指定されています。かつての乱獲により個体数が激減、絶滅が心配されましたが、現在は、各地で増加傾向にあります。四肢は太くて短く、急な斜面を歩くのにも適しています。黒い円錐型の角(洞角^{どうかく})を持ち、ニホンジカのように毎年生え変わることはなく加齢と共に伸長していきます。雌雄共に眼窩前下部に大きな眼下腺^{がんか}（臭腺^{がんかせん}）を持ち、木に擦りつけてマーキングし、縄張りを主張します。主に、ブナやミズナラ等が優占する落葉広葉樹林、針広混交林に多く生息し、様々な樹種の木の葉、草本類、ササ類などを選択的に採食します。牛と同じく反芻胃^{はんすうい}をもつほか、ため糞をする習性があります。10～11月にかけて繁殖行動を行い、翌年の5月～6月頃に通常1仔を出産します。

只見町では、町内全域の山間部に生息していると考えられ、4月下旬～5月頃に雪崩がおさまった露出した岩場などでよく目撃されます。この時期に山に入ると、カモシカのため糞をいくつも見つけることができます。民家近くの山の斜面にも頻繁に出没し、その姿を見かけることがあります。かつては、シシあるいはアオジシと呼ばれ、狩猟の対象になっていました。毛皮も利用されましたが、肉が美味しいのでよく食べられたそうです。